

巡礼でのマナー

四国遍路中には、絶対的に守らなければならない規則はほとんどありませんが、巡礼者はこの旅における基本的なマナーを知っておくことが推奨されます。1 つ独特の習慣として、橋を渡る際には、音を立てないように杖を浮かせて歩くことが挙げられます。このようにして歩くのは、四国遍路の創始者と考えられ、四国を巡った際には橋の下で眠っていたと信じられている僧の弘法大師の苦行に敬意を表するためです。より一般的な事項として、巡礼者は巡礼先の寺や巡礼路の多くは地元の人が暮らす地域の中にあるということを理解すべきです。地元の人々は、ポイ捨てや私有地への立ち入りをしない、そして特に朝早くや夜遅くには騒音を立てない巡礼者を歓迎します。そのような巡礼者には、地元の人々は食べ物、飲み物、小さな贈り物、もしくは宿を提供してくれることがあります。お接待と呼ばれるこの習慣は、数世紀前に遡るものです。中世の村人たちは、卓鉢をする巡礼僧に施し物をしていました。江戸時代（1603-1867）に一般人が巡礼をするようになると、地元の人々は巡礼者に食べ物を与え、病気になれば看護し、家から遠く離れた巡礼先で亡くなれば埋葬をしていました。お接待の伝統は、かつてほど広く行われているわけではありませんが、今でも四国の人々によって守られています。